

ソ米関係史(1934-1939年)に関する予備的研究(1)

駒村 哲 社会科学教育講座

キーワード：ローズヴェルト、スターリン、アルヒーフ

はじめに

国交樹立(1933年)後の米ソ関係は期待に反して順調には進展しなかった。その主な理由はそれ以前からの懸案の諸問題(債務、プロパガンダなど)が米ソ両国にとり、満足のいく解決をみななかったからである。しかしながら、欧州及び極東において戦争発生の危険が高まるにつれて両国は新たな関係を模索することになる。本稿では2003年にロシアで刊行されたソ米関係史(1934年から1939年まで)に関する史料集の書評論文を手がかりにして、この時期の両国関係の基本的論点を整理したい。

『このあなたへの待機訓令は最後まで有効』

1937年2月13日付トロヤノフスキー駐米ソ連大使宛リトヴィノフ外務人民委員書簡から

本論文の題辞に出された引用文は1933年ソ米関係回復後、両国間架橋プロセスの特質をかなり正確に伝えている。その際両政府により発揮された賢明なイニシアチブの結果両国で受け取られた共通利得は予想されたように、国家安全保障、外交協力、経済、文化の領域においてこのイニシアチブの徹底した拡大・深化の途上で各種障害を両国が除去することをもたらさなかった。ところがそのような十分価値があり多方面にわたる協力の客観的必要性を両国ともにあたかも認識していたようだ。このパラドックス—無数の国際危機の波に見舞われ、力をうまく合わせることに自然かつ当然憧れを抱いていたが、互いにかかなりの距離を保ち、時々疎遠で敵対的になっていた2大国の奇妙な強情さ、をいかに説明するか。

提起された質問に答えることは諸問題の様々な側面に触れることである、すなわち認識不足の伝統的に平凡な動機(日常レベルで生活や風俗の『他人の』イメージに対する反感)から教育システムを基盤に思わしくない過去の具体的経験に関連して習得された国民の自意識あるいは政治エリート of 軍事・戦略思考に価値判断を行うイデオログにより求められたものまで。今日我々は価値ある史料を手を持ち、そもそも長い間研究者が入手不能であった位置からやっと問題を見ることができる。(全く条件付きで)ソ連側の決定承認プロセス、『ニューディール』時代アメリカのソ連知覚、この国の『支配』階級分裂の深刻さ、大恐慌の中心地で判明したニューディーラーの政治志向とクレムリンにとり特徴的であったその認識における彼らに対する信頼の程度を説明する歴史原典が入ったことは本質的に以前は一度もなかった。

20世紀露米関係史に関する手堅い刊行物の第4巻が2003年に出版されたことは、とりわけその巻に含まれた史料集のもう1つ重要な特徴のおかげで真の出来事である。大部分の場合本巻は、ロシア連邦対外政策アルヒーフから以前は決して公表されていなかった文書を含んでいること、また少なからず重要であるが、戦前期ソ連外交の生きた(形式的・儀礼的でない)歴史について、具体的には主として現場で実際に行われている外交ではなく、外務人民委員部指導部及び結局クレムリンへの戦術経

過と戦略立案のための、分析活動、その前に提供される構想、情報、オリエンテーションを映し出した危機の30年代における『アメリカのセグメント』側について、それらが我々の知識を本質的に補ってくれることはあまり言わない⁽¹⁾。本巻は純補助的性格の最も興味深い文書（ロシアでも、外国でもこの種の公刊にとり概して特徴的ではないが）—参考資料、指令機関の決定案、カードル問題のやりとりも含んでいるが、大事なのはアメリカ側立場の叙述であり、それが30年代のソ連外交官たちにもどのように見えたかということである。これらはすべてまことにユニークな史料で、長い間研究者たちから『切り離され』ており、（これについては外交機密の分析に関連して使われたルシアン・フェーブルの言葉を借りれば）、多くの客観的前提条件にもかかわらず、『米ソ政府間の真の友好関係と緊密な協力』の確立・発展を妨げるような『隠された歴史の力』⁽²⁾を見ることもできなかった、これについては1934年1月8日初代駐米ソ連大使トロヤノフスキーがローズヴェルトに信任状を奉呈した際、ローズヴェルト大統領が語った。

本論文で検討対象となった露米関係史に関する文書史料の年代順『照応』を指摘するのもまた重要である。第4巻の時代範囲は20世紀30年代の戦前5年間を扱っており、世界史全体にとり、具体的には両国の歴史にとり第1級の重要な事件でいっぱいである。慎重な接近の方向でソ米は16年の空白の後疑いを克服して困難な状況に入った。過去のイデオロギー上の食い違いと社会体制相違の重荷から相互の信頼はあまり大きくなかったが、国家指導者たちの健全な政治的プラグマティズムが軍事対立の異常な状況下、より緊密な相互関係と同様に両大国にかかわる死活的利害のために一種の最前線防衛地帯に役立ちうるような関係の安定を確保した。

決して親密ではないが、疑いなく生産的で概して米ソ双方に有利な関係のためにある環境を創り出す時期のまたとない特徴について、もしかしたらまだ話せるかもしれない。世界経済危機が独特のやり方で両国の現関係を経済的に同じにした。統計データではなく、科学技術的でもないが、成長テンポと近代化スケール、国内活気の蘇り、国防潜在力成長、人々の科学・教育レベル、の少なからず重要な指数によれば。一方で米国について言う場合には、大恐慌は『アメリカシステム』に著しい損害を与えたが、他方でソ連について言う場合には、ソビエト社会主義発展の高テンポを際立たせて、ソ連の威信が上がり、『ロシアの奇蹟』⁽³⁾のようなことを話したり、書いたりしなければならず、記録的な期間で巨大な国際的威信を有する他の大国と同じ水準になった。どうもソ連経済は科学技術面で先進的なアメリカ資本主義の動きの鈍くなった万能車に追いつき、場合によってはそれを追い越さえしたようだ（原料資源の増大、エネルギー、輸送、冶金工業での先進的経験導入、防衛産業のイノベーション構想実現など）⁽⁴⁾。ソ連・スターリン指導部の指令、旧資本主義破産の結果米国行政の『ニューディール』という社会リベラリズムの方法で行われる社会改造の実験的な性格が社会・国家制度の加速された近代化と促進されたペレストロイカの件で首位を争うライヴアルの立場に両国を追い込んだ。宣言された目標の類似（もしかしたらはるかに遠い）—旧体制の欠陥から抜け出すことと経済力の無組織なゲームへの子供や普通の市民の依存を克服すること—が相互利益と互いをよりよく理解する希望を呼び起こした。注目に値するのは、ワシントンのソ連大使館とモスクワとの外交上のやりとりの中で、国民の広汎な大衆に支持される『ローズヴェルトの進歩的施策』、『ローズヴェルトの社会改革』、『ローズヴェルト主義』のアメリカ労働者階級の『強大な進歩ブロック』による好意的な評価にそのことは現れていた⁽⁵⁾。

ローズヴェルト及びニューディール派（直接・間接）と左派及び中道左派の社会運動との繰り広げられていた対話及び『揚力』として選挙ブロックにそれらを組み入れることは、自らホワイトハウス、ローズヴェルト大統領、彼の側近たちとの非公式接触状態にあるのをソ連外交が思いがけず感じるよ

うな状況を最初から創り出した（45頁）。イデオロギー上の親近性については何ら話題にできなかったが、ハーフトーンや何らかの動きや変化を排した黒白の描写の中ではなく⁽⁶⁾、多少とも多面的文脈の中で互いを見るチャンスを両者は得た。反ソビエト主義のコンプレックスに悩まされていない新しい人々がワシントンの権力機構にやってきたというこの認識は、その勤務地が米国の首都であったソ連外交官たちに楽観主義を起こさせた。最初の印象があまりにも楽観的すぎていたとしても、ソ連代表たちはローズヴェルト指導部の接触を進める用意があることを評価し、それを合図と期待を抱かせる出来事として解釈した。1934年3月3日、トロヤノフスキーはリトヴィノフに次のように書いた。『状況全体を広汎な層の我々に対する同情と関心の高まり、ローズヴェルトと彼の側近の良好な態度、しだいに軟化してくる国務省の自制として私は現在評したい』（44頁）トロヤノフスキーの後任者ウマンスキーはずっと後の1938年12月1日、共産主義を『ファシズムに劣らず危険なもの』と声明したことでローズヴェルトに文句を言った、にもかかわらずミュンヘン後の危機的状況下、ファシズムを第1にしたことを強調した、すなわち『彼の取り巻きは進歩的である。彼の国内政策で右派のずれは見られない。ナチス党員と日本人を彼は非常に嫌っているが、どうやら反動勢力の活発化をますます心配しているようだ』（697頁）

それでも、米国政治エリートの『思考方法』における新しい要素に関する第1印象は、アメリカ人の大衆意識においてソビエト実験は、無条件に成功し、資本主義に対して争う余地のない優越性を示すものとして受け取られたのではないという重苦しい感情から免れなかった。スターリンの国内政策及び対外政策は一方では同情、賞賛さえ呼び起こし、他方では積極的不承認、憤慨を呼び起こした。わかりやすい中道左派プレスのおかげで最後ではないが、ソビエト体制に応じて使われはじめた『全体主義』概念は、集団安全保障提案であろうと極東における共同調停行動構想であろうとモスクワのどんなイニシアチブに対する不信も克服するのが難しかったアメリカ人をびっくりさせた。アメリカニズムの意義に対するぐらついたが、失われなかった信頼は親ソの共感拡大にとり障害となった。ローズヴェルトによる16年間の不承認政策放棄（ソ米外交関係回復をアメリカ人の大多数が支持した）はとても順調に、支障なく行われたが、1934年1月6日付モスクワへの書簡（すなわちローズヴェルトとトロヤノフスキーの友好的話し合いの2日前）でアムトルグ理事長ボグダーノフが強調したように、この『合意』は誰かを騙さないはずがなかった。それは、《ソビエト連邦について多くの人々に大々的に知らせない（無知）結果、またあれこれの『利害』の不満の結果、それほど重大ではなく、もしかしたら将来ぐらつくかもしれないものであり、正常関係回復後は現実的利益を彼らに与えない》ものである（9頁）。

一定期間バラ色の期待のすぐ後、対立する兆候をもった現象に生じた相互引力の軽い可逆性が本性をさらけ出して、社会的気運のバロメーターである議会、その共和・民主両翼のこうしたすっかり否定的な立場とトロヤノフスキー駐米全権代表は無理矢理結びつけられた。1932年と1934年の選挙で自己の勝利を揺るぎないものにするために大統領の与党でさえ将来のソ米関係諸問題を入念に避け、私有財産を法の保護なしと宣言して国家に対するあまりに気前のよい配慮で選挙人の不満を呼び起こすことを恐れた、議会のホワイトハウス路線への支持の弱さでローズヴェルトの動揺とハル国務長官のこれ見よがしの超慎重さを説明することにトロヤノフスキーはモスクワへの至急便で努めた。『民主党員は時によっては彼（ローズヴェルト—原著者）を変えるか、反対投票をする』と大使は書いた。第1期の変わり目にローズヴェルトが大統領の地位（1933—1936年）にとどまる見込みは少なかったし、実際は全くなかった、そのうえそれは『ニューディール』改革の成功あるいは失敗に完全にかかっていた。『米国と我が国との関係の運命はある程度ローズヴェルト自身の運命と結びついていると

いう事実を我々は考慮しなければならない』(126頁) 完全に起こりうる大統領の人気低下と同時に細い糸があつという間に引きちぎられた。『歴然たる我々への同情もない』と1936年12月、ローズヴェルトの政治的成功と左派勢力の影響がピークの時、トロヤノフスキーはリトヴィノフに書いた(505頁)。

内側からアメリカの生活を眺めて、はじめのうちソ連外交官たちが下したもう1つの重要な結論は、米国民は対外政策問題に低い関心しか感じず、国内政策を優先するという点にあった。社会主義の成果について(『ソ連とはもっぱら地理的概念である』) アメリカ人が『事情に暗いこと』、生まれつきアメリカ人は知識欲が強くないこと、ひたすら国内問題に自閉していること、をここから説明する誘惑が生じた(142頁)。もちろんこれは半分しか真実でなかった。そこに特有のイデオロギー要素(『粗野な個人主義』)に反対する社会責任国家のための運動)をもつ米国で展開されている国内対立をじつと眺めて、社会・経済問題で時折緊迫する論争は政治キャンペーンの過程で反ソヒステリーの発作を誘発することにトロヤノフスキー全権代表は気づいた。右の反対派からの『ニューディール』に対する非難はスターリンの近代化とそのあらゆる否定面の批判により強められたということが明らかになった⁽⁷⁾。《ローズヴェルトの『実験』はソビエトの『実験』を真似たものであり、それに関連してソビエト連邦についてのあらゆる恐怖が語られている》(188頁)と1934年7月24日、トロヤノフスキーはリトヴィノフへ書いた。『大ブルジョアジーの側だけでなく、中ブルジョアジーも、またかなりのプチブルジョアジーの側からも、共産主義とソビエト連邦に対して辛辣な憎悪』(188頁)を引き起こす労働大衆の左翼化をそれに付け加えなければならないと彼は続けた。

かくしてわかったことだが、国内政治闘争激化は対外要因知覚に累積効果を与えるので、政府は巧みに切り抜けて、負わされた義務その他を回避せざるを得ない。どの方法に従うべきか、世界の出来事に対して誰と責任を分け合うべきか、モスクワは少し考えてみなければならなかった。『反ラディカルなプロパガンダの有効性とあれこれのその措置の国際的結果に対するモスクワの不十分な関心により懸念を表明して、共産主義への敵意が優勢となって、合衆国を含む各国対外政策にその影響を与える時機は簡単にやってくる』(188頁)と1934年7月24日、トロヤノフスキーはリトヴィノフへ書いた。

最重要の生きた公理—集団主義と、個人主義及び財産上の不平等に反対する普遍的な社会的平等—の両立不能が大衆の認識レベルでソ米接近の障害を創り出した。そのうえ共産主義挑戦の形をとった大国ロシアの地位復活のために思いがけず米国側からの潜在的脅威シンドローム出現をそれは促した。あらゆる状況の筋の通った解凍への主要な障害のままであったのは、非常に多くのアメリカ人の頭を離れないイメージである、すなわち世界社会主義革命の加速化とソビエト連邦をグローバルな野心をもつ大国に変える任務を相変わらずボリシェヴィキの本分に入れていたことである。その考えは本巻の編者たちが集めたソ連外交官たちの米国からの多くの報告の中にあれこれの形で存在している。

本巻の間接的証拠は駐米ソ連大使館1等書記官ネイマンと権威ある雑誌『フォーリン・アフェアーズ』の編集長フィッシュ・アームストロングとの1934年7月16日付会談記録の内容の中に見られる。後者の『誘導』質問は、将来不可避のヨーロッパ戦争とそれに関連して領土拡張、バルト諸国、ドイツ問題についてモスクワの考えていることに言及したものである(184頁)。アメリカの新聞・雑誌は極東で『ソ連膨脹』の防壁をつくる必要性に対して胸の内をさらけ出した。東支鉄道紛争に関連するソ日関係緊張について新聞や雑誌のページでネイマンに教えなければならなかったコメントの中で彼が書いたように、『希望すれば戦争を奨励するものとして解釈できるような程度の公平かつ客観的な

もの』(216頁)が存在した。極東で『日本侵略の言い訳を現在探し始めている』(216頁)多数の非友好的筆者のアメリカジャーナリスト界登場にソ連外交官たちは当惑していた。日本はソビエト連邦の増大する力を均衡させることができる—このことから親日的プロパガンダを強化すること、太平洋地域におけるモスクワの調停者としてのイニシアチブに答えるつもりのないこと。毎日アメリカの新聞を見てソ連外交官が導いた悲観的結論。ネイマン、スクヴィルスキー、ルビニンのような経験ある分析家たちはアメリカの中立と『善隣』外交の二股をかなり素早く見分けるようになった。

大統領の『左派の政略』(215頁)が望んでいたほどはソ米関係プロセスに影響しなかったという事実を確認して、ネイマンは以下のように要約した。『ソ米関係の見地からローズヴェルトの左派路線の独自性は、それらと対ソ関係改善問題との間に何らの結びつきもないという点にある』(216頁) 1934年9月8日付ネイマンの状況分析記録からこのテーゼで何が大きかったのかは言うのが難しい、すなわち実現しなかった期待に関する幻滅あるいはローズヴェルトにとって政治的損失なしに一般宣言からソビエト連邦との緊密な関係へと道を進ませる二重三重の困難の認識。もしかしたらそうかもしれないし、違うかもしれない。以下は重要な指摘、すなわち何らかの真剣な期待を残さなければならなかった、分かったとだが、ローズヴェルト・リトヴィノフの『握手』は決して即時の突破口を約束しなかった。それはまず第1に極東方面と欧州での安全保障問題に触れるものであった。

1934年9月11日、駐米ソ連全権代表部参事官スクヴィルスキーは、ソビエト連邦に対するアメリカプレスの高まる反感を考慮して、『我々の関係の蜜月は終わり、すでにはっきりと失望感が感じられる』(223, 290頁)と書いた。両国内の紛糾が芳しくない状況に役だった—ソ連では反体制的な考えに対してスターリン指導部の攻撃が繰り広げられたが、米国では勤労者と雇用者との間で産業の最も先鋭な対立の1つに火がつき、また各種ラディカルなプチブル運動の活発化が起こった、これについては1934年10月23日、ネイマンがリトヴィノフに報告したように、《ローズヴェルトの『ニューディール』の限度》(254頁)⁽⁸⁾を越えているが、ソビエトとの協力を考える気はない。それに加えて、1934年11月に選出された議会の『左翼主義的傾向』もソビエト連邦との通商拡大や相互関係改善への関心とは決して合流しなかった。この結論を下して、ネイマンはまさに左派層には外国の債務に反対する特異体質と孤立主義傾向が一段と強力に広がっているという点で彼に理由を見つけてやった(259頁)。

自分の嵩張る大多数の支持を大事にして、ローズヴェルトはヨーロッパの『諸主義』を恐れ、対外政策上の積極性に反対していた支持者のリーダーたちに対外政策上の優先を教えた。加えて民主主義グループではキーロフ殺害(1934年12月1日)後スターリンの抑圧が一段とひどく激しく受け取られた。トロヤノフスキー大使が書いたように、このことが『悲観主義の視角から我が国と米国との関係問題を解決するよう』(300頁)彼に強いた。外見は予算上の理由で説明された自国の海軍武官及び空軍武官のモスクワからワシントンへの召還は、債務論争がリトヴィノフの思わせぶりの訪問後比較的短期間に山積した問題のもっと広汎なスペクトルをめぐる不一致の一部に過ぎないことの説得力ある証拠として役だった(302頁)。ソ連国内秩序に対するアメリカプレスによりかき立てられる敵意がソ連大使館の活動に少なからぬ困難を創り出した。アメリカ知識人はそのリベラルな中核というよりもむしろ、多かれ少なかれ(すでに一様ではなく)社会主義の信念を分かち合うか、あるいは『ソビエト実験』(313, 363頁)にただ共感したようなグループさえ、ソ連のノメンクラトゥーラ独裁政治現象とその独特の環境での内部選抜に自分たちがとても敏感であることを示した。時折この結びつきできわめて大胆であったのは、1937年3月2日付いわゆる『反ソビエト・トロツキー・センター』(539-543頁)裁判に対する米国の反応についての、駐米ソ連臨時代理大使ウマンスキーの外務人民委員部宛

書簡。『我々にとり芳しくないプレスのコメントは普遍的である』(540頁)と書簡で語られた。

アメリカではスターリンの『テルミドール』についての概念が生まれた。反対派に対するソ連国内政策の引き締めについて、ソ連北方のラーゲリなどについて、新しい情報が入るにつれて(332, 363頁)。承認支持のリベラル派と民主派の戦線は分裂した。パートナーシップ思想に対する忠誠を持ち続けていたプラグマティストは『古参』ボリシェヴィキに対する迫害の中に1917年に宣言された権利と自由の違反を見出したということを書き説得的に証明する。センセーショナルな注目を受けるようになったのはソ連の現実を否定的に解説したチェンバリンの著書である(178頁)。つい昨日まで『ソ連社会主義の現象』について肯定的なトーンで論じていたその著者は、大恐慌の苦境にもかかわらず伝統的なアメリカの価値を信じ続け、『神を認めぬボリシェヴィズム』に西欧文明の主要な脅威を見た人々の目には突然最も大きな権威になった。ソ連体制とドイツの『新秩序』を同一視するような場合が頻繁になった(363頁)。

外交文書は両国関係のあるエピソードに再び光を当てる、それはもう少しで外見上重大な危機の原因になるところだった。国務省とモスクワの米国大使館(激情をあおり立てる主役はブリット大使のものである)では1935年夏に開かれたコミンテルン第7回大会をクレムリンの狡猾さの現れと見なした。ワシントンはムツとした顔をした、すなわち両国は1933年に相互に内政干渉しない義務を負った、ところがモスクワ大会に米国共産党代表団が参加し、演説した。国務省の抗議の外交措置は其中で強い口調が感じ取れ、米国の『外交団』は両国間の外交関係回復の主要な反対者であったということに注意を促した。モスクワでは特別措置で『消火』が行われた、クレスチンスキーの言い方をすると、『異常な政治的慎重さ、自制、忍耐』(361頁)に訴えて。国務省の行動は単なるプロパガンダ的なものではなく、その力を結集している左翼反対派を見つける現実的危険があることを理解して、ソ連外務人民委員部は機転を利かせて、しかし卑屈の色はなく、コミンテルンの決定は米国の内政に干渉するものではないこと、そもそもコミンテルンの存在はソ連外交の実際活動とはいかなる関係もないことを米国は理解しなければならないことをアメリカ外交官に吹き込んだ。国際舞台でソ連国家を代表するのはそれ(外交)のみであり、優先権をもってソ連の国益を守る最重要の機能を果たしている。

『コミンテルンの難事件』に関連して本巻で公表されたいくつもの文書が関係正常化への障害を除去する点で外務人民委員部と米国のソ連大使館のこの『真相解明』活動を例示している。ついでにこの1番の障害は多少とも本質的役割を果たすのをすぐに止めた。ローズヴェルト大統領が『コミンテルンの難事件』に関連して状況を劇化する気のないこと、ましてモスクワに対して何らかの制裁の件を検討したり、あるいは自国大使召還で脅すつもりのないことを確信したとき、トロヤノフスキー大使はより真実に近づいたと我々は現在言うことができる。今度の大統領選挙(1936年)でソ米関係に進展がないことにローズヴェルトが不満に思っている経済的原因をトロヤノフスキーはその解説で次のように主張した、すなわち債務の未解決問題がきわめて病的な作用を及ぼしており、政府の『ニューディール』の威信を傷つけた。ローズヴェルト・リトヴィノフ合意に従ってソビエト連邦の経済条項遂行をホワイトハウスが確保できない限り、保守反対派は大統領の『ロシア政策』について成功の望みのない構想として語る機会を得た(368頁)。

多くの研究者が考えたように、ローズヴェルトのおかげで事態は『冷戦』のようなものには至らなかった。それどころか、文書を読み込んで分かるのは、広い範囲の問題で相互コンタクトの有利な体制を維持することへの長期的関心を両国政府が新たに認識することがどのように生じたのかということである。大事なことは戦争接近というテーマが多かれ少なかれワシントンとモスクワの不一致を押しつけ始めたこと。すでに1935年秋、一定の前進をもたらした。ブリット大使は何でもあけすけに話し

始めて、ローズヴェルトは批判には屈しないし、ソ米関係の断絶には進まない、彼（ローズヴェルト）はソ米関係に『特別の愛着』を覚えているのを認めた（375頁）⁽⁹⁾。自らブリットは付け加えて、戦争は避けられないが、それゆえ『両国はともに進まなければならない』（381頁）

しかしブリットはまず第1に個人的成功を熱望し、彼にとり主要な問題—債務問題でモスクワが彼に相互主義で答える用意がある限りにおいて、ちょうど自分の行動で協力する気があった⁽¹⁰⁾。ハルはその保守主義にもかかわらずはるかに大きな信頼を引き起こしたとソ連外交官たちは確認した。国務長官の注目を集めたのは極東の事件とその関連でソビエト連邦との協同行動（あるいは少なくともその見せかけ）の案（バリエント）であった（390頁）。本巻文書により、『ロシア問題』におけるローズヴェルト政権の路線の移り変わりを徹底的に追跡することが可能である、すなわちブリット型のきわめて厳格な積極的防御（『承認の代金を支払わなければならない』）から安全保障問題とまず第1に極東に関してソ連との接点を模索することまで。極東の事件は世論を分裂させ、条件付きで言えば、親ソ気運を強めた。1936年12月に債務についての交渉を『なくなったもの』と宣言することが決定された。外務人民委員部はそれを自分の手柄にさえして、外務人民委員部が見せた毅然とした態度がワシントンの覚醒とブリットの影響力喪失に寄与したと指摘した（407頁）。この意見と争うつもりはないが、少なくともブリットに関してはそれは真実にとても近い。

ブリットはソ米対話で信頼できる調停者であることを止めた。モスクワでは彼をソ日対立の挑発者と見ていたが、ホワイトハウスは忍耐力と節度を失った、思い上がった野心家と見ていた⁽¹¹⁾。30年代半ば頃生じた行き詰まりから関係を抜け出させるために両国が講じた複雑な外交上のマヌーバーを公表される文書は暴露する。1936年選挙でローズヴェルトの確固たる勝利、ソ連の経済・文化の成功がその客観的前提条件を創り出したが、この好ましい成果をもたらしたのはもっぱら外交努力であった。1935年分のソ米関係に関するソ連外務人民委員部書類で確認されたのは『11月の記念日に当たり、11月7日に公式の祝辞をソ連に送り届ける少数の政府首脳のうち1人はローズヴェルトだった』（408頁）とても深刻な疑いを克服して、大統領はモスクワの米国大使の地位からブリットを召還し、彼に代わって1936年11月にジョセフ・デーヴィスを任命した、1936年12月23日タス指導部宛タス・ニューヨーク支局長デュラントの秘密記録で言われたように、彼は『民主的友好関係確立の専門家』と自認した（519頁）。今度はソ連側から米国に文化攻勢をかけた。スターリンの『東洋専制政治』とドイツのナチス全体主義との同一性というプロパガンダのテーゼに関連して、音楽家のショスタコーヴィチ、芸術家のエーゼンシュタインとメイエルホリドが芳しくない衝動をいくらか吸収した。しかしながらそれだけでは不十分であることが分かった。（以下続く）

注

(1) [1]

(2) [2] c. 55.

(3) [3] [4] [5]

(4) この問題については、[6] [7]を参照。『産業組織の近くで見えるのは、恐ろしく無秩序な状態にあるが、実際にはしかし、以前は決してそうではなかったかのように、すべて動いており、都市、工場、機械は増大している』と1935年1月26日イギリスでカーピツァの妻は書いた。（Успехи физических наук, т.167, No12, 1997, с.1352）.

(5) [1] c. 688-693. (本集のさらなる引用は本文にある) アメリカの研究者ハンチントンとブレジンスキーは20世紀30年代米ソの経済・政治構造で同時に経験した深刻な変容過程に注意を払った。こうした変容を引き起こした様々な原因がどれ

だけあっても、彼らの考えでは、政治指導部に本質的に影響を与え、そのスタイルと方式に多くの新たなものを付け加えただけでなく、両国の政治路線を作り上げた環境をかなり変容させた（[8]p. 55.）。ソ連外交はアメリカ社会のいずれかの層への比較的広汎な『アクセス』、世界政治におけるソビエト連邦の肯定的に評価した役割を受け入れた。[9]はローズヴェルトの見るところでは『陰謀』であったソ米発展の共通性について語っている。

- (6) ソ連との外交関係回復を支持する米国社会ムードのローズヴェルトに対する積極的支持を、アメリカの一般的雰囲気の変化、その左翼化の兆候としてモスクワでは認識された。それは以下のことをも物語っている、国家の優先を第1位にし、世界の諸問題を第2位にした大国の分別ある国家活動家をボリシェヴィキ指導者の中にアメリカでは見出した、それについては当時の新聞でふつうに語られたように。

アメリカの歴史家エドゥアルド・マークの論文の興味深くかつ内容豊富な各種事実で示したのは、30年代の米国政治思考で生じた『テルミドールの語形変化』（全然新しくはないが、ソビエト体制をロシアにとり伝統的な帝政秩序のリメイクとして解釈すること）が、マス・メディア界の若干の保守的観察者もソビエト連邦を変動の中でみて、『世界の焚き火』を焚き付ける政策、革命的国際主義のスローガンとの食い違い、国家の境界と領土保全というひとえに伝統的な課題遂行から大きく踏み出す途上でソ連の発展ができるだけ速く進むことができることと結びつけられたこと（[10]pp. 937-962.）。

- (7) ソビエトモデルの権威主義的集団主義が紛れもない批判の嵐を引き起こした。その主張に組み入る者の中にはJ・ルイス、H・トーマス、W・チェンバリン、W・リップマンなど、影響力のある時事評論家や社会活動家があった。公開の連続講演（なかでも新聞や軍事教育機関）でソビエト連邦指導者の『世界志向』を抑止するイデオログとして自己について語ったのはロバート・ケリー国務省東欧部長。（Georgetown University Library. Robert F. Kelly Papers. Box 2. “The Political Structure of the Soviet Union”. Lecture delivered at Naval Academy. April 30, 1935）。

- (8) Нью дил (new deal) — “новый курс” (англ.)

- (9) 30年代米ソ対話の本質を理解する研究者にとり、特に興味深いのは1935年11月23日付両国関係の状態に関する駐ソ米国大使ブリットと駐米ソ連大使トロヤノフスキーとの詳細な会談記録（c. 379-382）。両大使の率直な会話（この記録からの断片が論文本文に入った）は国際情勢における見方の相違と類似の程度及びその各々が相手行動評価の指針となった道義的・倫理的原理をえぐり出した。

- (10) 本問題は1年前に出た次の研究書[11]がアルヒーフ史料に基づいて検討している。

- (11) [12]

参考文献

- [1] Советско-американские отношения. 1934—1939. Под ред. акад. Г. Н. Севостьянова. Составители Б. И. Жилев, Е. М. Зайцев, Л. М. Зайцева, В. И. Савченко. М.: Международный фонд “Демократия”, 2003, 800 с. (серия: Россия. XX век. Документы)
- [2] Февр Л. Бой за историю. М., 1991.
- [3] Wilson E. Travels in Two Democracies. New York, 1936
- [4] Filene P.G. Americans and the Soviet Experiment, 1917-1933. Cambridge (Mass), 1967.
- [5] Levering R.B. American Opinion and the Russian Alliance, 1939-1945. Chapel Hill, 1976.
- [6] Источник. Документы русской истории. 2001, No5, с. 56-66.
- [7] Есаков В. Д., Рубинин П. Е. Капиза, Кремль, наука, т. 1. М., 2003.

- [8] Brzezinski Z., Huntington S.P. Political Power: USA-USSR. Similarities and Contrasts, Convergence or Evolution. New York, 1965.
- [9] Д а н н Д. Между Рузвельтом и Сталиным. Американские послы в Москве. М., 2004.
- [10] Mark E. October or Thermidor? Interpretation of Stalinism and the Perception of Soviet Foreign Policy in the United States, 1927-1947. —American Historical Review, v. 94, No4, oct. 1989.
- [11] Cassela-Blackburn M. The Donkey, the Carrot, and the Club: William C. Bullit and Soviet-American Relations, 1917-1948. Westport (Conn.), 2004.
- [12] К е н н а н Дж. Дипломатия второй мировой войны. Глазами американского посла в СССР Джорджа Кеннана М., 2002.

付記 本稿で訳出紹介した書評論文は以下のものである。なお本文の引用頁は[1]からのものである。

М а л ь к о в В. Л. Советско-американские отношения 1934-1939 годов. новые документы.

(Новая и новейшая история, 2005, No. 6, с. 114-129.)

(2006年5月10日 受理)